

# 神崎驥一日記<sup>①</sup>

自一九一六年一月一日  
至一九一六年一月八日  
自一九一九年七月一日  
至一九一九年九月一七日

一九一六(大正五)年「アメリカ合衆国」

一月三日 天気 風雨 寒暖寒 発信 受信 賀状

一月一日 天気 雨 寒暖寒 発信 賀状 受信 賀状

一月四日 天気 雨 寒暖寒 発信 賀状 受信 賀状  
風雨止マズ、出桑(港)ノ予定ナリシモ家ヨリ出テズカル  
列等シテ正月ノ三日ヲ過ス

新年ヲ迎フ、別ニ新ナル感想モナシ、歳月の歩ミノ速カ  
ナルニ驚キタルか関ノ山、十一時領事館邸遙拝式<sup>②</sup>ニ列ス、  
事務所ニテ賀状ヲ認メ、四時前帰宅ス、五時友人数名ヲ  
招キ新年ヲ寿ク、佐藤、尾崎「御夫婦」<sup>③</sup> 国虎、野田  
〔弥助〕<sup>④</sup>ノ諸氏来ル、夕方川島氏御夫婦<sup>モ</sup>来ラレ歌カルタ  
等ニ欲ヲ尽クス、世事ヲ全ク忘レ賑かニ面白キ一日ナリキ、  
深更就眠〔直筆は二五頁〕

一月二日 天気 暴風雨 寒暖寒 発信 賀状 受信 賀

状

十二月迄執務ス

近來稀ニ見ル暴風雨、新年会ニ招カレタルモ行カズ 午  
後川島氏方ニ参ル

一月六日 天気 曇 寒暖寒 受信 賀状  
終日会務多忙変リナシ、午後八時、事務局及ヒ出品協会員  
ノ為メ送別会ヲ催ス、六団体代表者発起ノモノナリ、自分  
司会ス盛会ナリ、二式ハ他ノ発起者ニ托シ中坐事務処ニテ  
執務依然多忙、午後二時未納金処分委員会、四時参事員会

アリ、七時日本倶楽部ニテ賜暇帰朝ノ沼野（安太郎）<sup>(6)</sup>領  
 事ノ為メ送別懇談会アリ、午後一時星野暢氏歓迎会アリ

終日執務多忙、午後六時白人青年会招待ノ懇談会ニ出席ス  
 一月八日 天気雨 寒暖冷 発信賀状十七、端書、兄  
 上、久、<sup>(7)</sup>吉岡美津<sup>(8)</sup>

一月七日 受信賀状

金 銭 出 納 録

月日	摘 要	収 入				支 出				差 引 残							
		万	千	百	十	円	銭	厘	千	百	十	円	銭	厘			
一 一	電車月極メ切符					三	〇	〇	〇								
〃 〃	電車賃					一	〇	〇	〇								
〃 〃	買物					一	〇	〇	〇								
四	帝国ホテル払					三	五	〇	〇								
〃 〃	家賃					二	五	〇	〇								
〃 〃	電車賃					二	五	〇	〇								
五	同					一	〇	〇	〇								
	送別会費					二	五	〇	〇								
	昼食					二	五	〇	〇								
	電車賃					三	〇	〇	〇								
六	送別会費二回					四	〇	〇	〇								

						〃	〃	〃	〃	〃	〃	八	七
						講金	当用日記 二	昼夕食電車賃	音楽会切符 二	名刺新年賀状	〃	送物花代	電車、昼、夕食
													万
													千
													百
													十
													円
													十
													銭
													厘
													千
													百
						三					一		十
						五	一		一	三	〇	二	円
						〇	〇	七	〇	五	二	五	六十
						〇	五	〇	〇	〇	〇	〇	〇銭
						〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇厘
													千
													百
													十
													円
													十
													銭
													厘

〔以上、四〇一一〇二頁〕

八時半起床、沼野〔安太郎〕領事事務局、出品協会員等帰朝ニ付キ天洋丸へ見送りニ行ク、畑〔歡三〕<sup>(9)</sup> 兄田舎ヨリ帰国、事務所ニ訪問セラル、七時退勤、八時仏教会ニテ大学々生俱樂部主催ノ音楽会ニ出席盛會成効、<sup>(10)</sup> 十二時五十分就眠〔以下、空白〕

(表紙)

一九一九〔大正八〕年 K. Kanzaki, Tokyo <sup>(12)</sup>

七月十一日、

午前、渡邊金三<sup>(13)</sup>、川崎巳之太郎君來訪、渡邊君高橋博士トノ會見内容ヲ語ラル。

青木儀一君來宅、談話中、米國日本人學童問題<sup>(15)</sup>ニ関シ意見アリ。

午後、澁澤事務所訪問、男爵ニ面會、從來ノ經過并ニ外務省ノ態度ヲ報告、男爵ノ御意見ヲ求メ、且ツ日米新關係ノ事情報告以外更ニ積極的具體方針ノ必要ヲ力説ス、男爵常ニ念頭ニアノ埴原〔正直〕<sup>(17)</sup> 田中〔都吉〕<sup>(18)</sup> 両局長ニモ七月談シタリ、募金ノ事ハ仲々難事ト信ス、然レトモ何トカ致サネハナラズト思ウ、關係委員以外更ニ兩三名ト相談スベシ。

博文館ニ淺田江村氏ヲ訪ウ、移民法提出方法ニ関シ意見ヲ求ム、日米關係ニ付キ投稿ヲ勸メラル、各新聞ノ反米態度ノ理由ハ人種問題、<sup>(21)</sup> 山東問題等ノ反動モ大ニ關係セルナラン。

夜、渡邊〔金三〕、東ヶ崎〔潔〕氏ト川崎〔巳之太郎〕氏ニ招カル、

七月十二日、

午前、藤平君〔日本〕統計協會ニ來訪。

山崎君來訪、帝國ホテルニ昼食ヲ共ニス、

神谷氏ニ同君ヲ通シ返答ス。

午後二時外務省ニ埴原〔正直〕政務局長ヲ訪ウ、

運動方法今少シ具體的ニ非サレバ困難ナラン、尚反對的意見モ來レリ、第一ニ關係アル四大会社ヲ説カサルベカラズ、運動ノ必要及内容ヲ更ニ説明シ、実行方法トシテハ日米關係委員會相互の事業トシテ協力スルモ差支ヘナカラン。

〔日本〕移民協會ヲ訪問不在。

七月十四〔日〕、一九〔日〕、

高橋徹夫君

淺田江村君

七月十九日、

植原悦二郎君ヲ訪問、支部設置ノ件及移民法改正ノ件ニ

付キ懇談ス

移民法改正案ニ関シテハ建議案ヨリモ法律修正案トナス方有効ナラントノ説又、大ニ尽力スベシトノ約束アリ、支部設置ニ付テハ米国籍ノ在東京ノ人々ヨリモ呼応セラレ度<sup>(タキ)</sup>旨希望シ、同志トノ会合ヲ勸メラル。

〔七月〕廿一日 長藤<sup>(28)</sup>太君来訪、Woods<sup>(29)</sup>氏関係ノ件ニ付キ相談ス、

新妻君統計協会ニ来訪、移民法改正ノ運動ニ関シ懇談、携テ報知社<sup>(30)</sup>ニ杉原木出君訪問、同伴ニ関シ依頼記者招待ノ斡旋承諾セラル、

山崎恵君来訪

〔七月〕廿三日、

堀越<sup>(31)</sup>氏訪問、Neur Supply Bureauニ 関スル実験談アリ、海外発展博覧会米国籍特派員三好氏帰朝ニ付キ築地精養軒<sup>(32)</sup>ニ招カレ種々懇談、

1、出品ニ対シ坪四十五円、

2、背景其他出品準備ニ関シ、

3、米国ハ特殊ノ移民地ナル故、米人ト携提<sup>(33)</sup>出品差支ヘナシ。

〔七月〕廿五日、 日米信託坂本芳治君来訪<sup>(33)</sup>

〔七月〕廿六日、

渋澤男爵訪問<sup>(34)</sup>具体案提出注意アリ、

〔七月〕廿八日、

内田嘉吉氏訪問不在<sup>(35)</sup>、

移民協会訪問、五日午前八時同会ニテ講演依頼アリ、<sup>(36)</sup>

三井藤瀬重役訪問、事情説明依頼、

故阿部氏ノ件ニ付キ土田氏来訪

海外発展博覧会招待三好派遣員報告会於築地精養軒開カレ出席、

〔七月〕廿九日、 埴原〔正直〕 政務局長訪問

〔七月〕卅日、

使命ノ件ニ付キ午後五時半〔東京〕銀行集会所ニ於テ会

合アリ、渋澤男爵、阪谷男〔爵〕<sup>(37)</sup>、藤山、堀越、田中〔都

吉〕通商局長及八月二日渡米ノ内田嘉吉氏出席、増田〔明

六〕<sup>(40)</sup>秘書、笠井君列席、男爵尤モ熱心ニ尽力セラル<sup>(41)</sup>

〔七月〕三十一日、

外務大臣〔内田康哉〕<sup>(42)</sup>面会陳情、

赤松書記官訪問、

土田氏来訪

八月二日、

天洋丸出帆ニ付キ内田〔康哉〕氏見送りノ為メ出浜、

同氏ニ依頼、本船便ニテ、牛島〔謹彌〕<sup>(43)</sup>、太田<sup>(44)</sup>、滝本〔為

(46) 三)、安孫子、Elliotノ諸氏ニ出書

八月五日、高等商業学校〔現・一橋大学〕ニテ移民協会講習会ノ為メ八時より十時迄講演、

十時半洪沢事務所ニテ男爵ニ面会、内田〔康哉〕大臣ト話合ヒ多少見込ミアリ、自分ハ暫シ避暑月未帰京ノ積リナリ、帰米ヲ暫ク見合スル方宜、カラン云々

牛島〔謹彌〕会長ヨリ返電、Get contribution as much as you can, return immediately 来ル、

同日更ニ滞在延期交渉ノ打電、

八月八日、〔横浜〕正金〔銀行〕梶原〔仲治〕頭取訪問不在、神奈川県保安課渡船者係訪問、

八日会ニ於テ日米新聞係ニ付キ講演

八月十一日、

山本熊太郎氏来訪

八月廿日、出浜、梶原〔仲治〕頭取不在、

牛島〔謹彌〕氏ヨリ来書ニ通、

八月廿一日、梶原〔仲治〕頭取ヲ私邸ニ訪問、相当ノ分担スベキ旨言明アリ、

引続キ時枝氏訪問、桑港ニ対スル私見ヲ聞ク、

午後井上〔準之助〕日銀総裁訪問、何トカ運動セザル可カラズ、明確ナル言明ナキモ相当ノ事ヲスベシトノ意ヲ洩

サル、

読賣新聞社ニ石黒三好氏訪問、

上野博覧会場火災ノ結果、海博延期ノ旨聞キ早速在日宛、

On account of fire exhibition postponed indefinitely. Stop every preparation 卜打電ス

八月廿二日、大倉〔喜八郎〕男〔爵〕訪問、戦争ハ不可能ニシテ兩國ノ不利益、解決ニハ経済的提携必要、可相成

米國ニ花ヲ持タス様スベシ、方針ハ積極的ナルヲ要ス、本日洪沢男〔爵〕ト会见ス、此ノ件ニ付テモ話スベシ、

八月廿五日、

洪沢〔栄一〕男〔爵〕訪問、内田〔康哉〕外相ト相談セリ

近日確答アルベシ

〔八月〕廿六日、移民協会加藤氏来訪

移民改正法ノ件ニ付き長時懇談

夕、大原氏招待

牛嶋〔牛島〕氏ヨリ来電

八月廿七日、浅野常務取締役訪問、

事情を述べ協力を依頼す、洪澤〔栄一〕男〔爵〕を通し申込みあれば相応の事をなすべし

〔八月〕廿八日、ランバス氏及 Rawling 氏同道洪沢〔栄

一) 男〔爵〕訪問

九月三日、?外務省埴原〔正直〕局長訪問

両国日米関係委員会協議ノ上進行ノ説アリ。

九月九日、洪沢〔栄一〕男〔爵〕訪問十七日委員会ヲ

開ク都合ナリ、自分ノ説ハ母国ノ同情ヲ伝エル程度以内デ

モ掘金スルベシ云ウニアルモ外務省側ノ説モアリ共二日米

関係委員会ニテ評議決定スルコトトセン

九月十二日、鈴木文治君ヲ訪問

九月十四日、川崎巳之太郎氏宅ニ渡辺氏訪問、牛嶋〔牛

島謹彌〕氏推せんの件相談

九月十五日、櫛戸君、牛嶋〔牛島謹彌〕氏推せんの事

を語る。

洪沢事務所に増田〔明六〕氏訪問、鎌田氏通せらるゝ様

依頼

九月十七日、午後五時日米関係委員会、

〔ノートの後から五頁より記入〕

Patent copy, 5 or 6.

庶務課次席、五六十円、外五割 bonas handy man.

企業課、百三十五円、百五十円

調査時期

Brazil - Argentine - Philippine - Peru.

京橋采女、二一、

飯田治彦、代理人。

【注】

(1) 本日記は市販の日記帳であり、表紙に以下のように書かれて  
いる。

「神武天皇紀元二千五百七十六年／丙辰／西暦紀元  
一千九百十六年／大正五年 当用日記／東京博文館発行」

なお、本論文中の「」は神崎自身の挿入であり、「」

は編者の注記であり、スラッシュは改行を示す。

(2) 一九〇八年の総領事館は、1274 O. Farrell Str. にあつた

〔在米日本人住所姓名録〕一頁、日米社『在米日本人年

鑑〕一九〇八〔日系移民資料集第三期、『日米年鑑』第四

集、日本図書センター、二〇〇一〕。ただし、在ロサン

ゼルス日本国総領事館からの連絡によれば、総領事館の

開設は一九一五年で、八月の住所は、「ロサンゼルスの

ダウンタウン、Temple Street と Spring Street の角に開

設され、後に West 2nd Street と Hill Street の角、さら

に一九三五年には 1151 South Broadway Street へ再移転、

日米開戦により閉館された」ところ。

(3) 遙拝式すなわち宮城（皇居）遙拝とは、日本や大東亜共  
栄圏において、皇居（宮城）の方向に向かって敬礼（遙

拜、拝礼)する行為であり、その場所は、日本国内(内地)、外地、外国を問わず行われた。国民に天皇への忠誠を誓わせる行為の一つであり、君が代の斉唱、日の丸の掲揚、御真影への敬礼とともに一九三〇年代には、天皇への忠誠を誓わせて国民の戦意高揚を図る目的で盛んに行われた。とくに文部省は一九三八年には「宮城遙拝国旗掲揚ノ方法等ニ関スル件」を通牒した(小野雅章『御真影と学校―「奉護」の変容―』東京大学出版会、二〇一四、一六頁、二八八頁)。

戦前、日本のプロテスタント教会は宮城遙拝を偶像礼拝として問題視したが、一九四一年、日本のプロテスタント教会の多くが、日本基督教団に統合されて国家の監督下に置かれたこともあり、宮城遙拝も実施された。日本基督教団は皇室が「日本国民の宗家」であることを受け入れ、四二年、教団総理は伊勢神宮の参拝も行った。他方、宮城遙拝を実施しない教会は弾圧され、牧師や信徒は投獄されることもあった。

(4) 桑港日本人会の事務所は、一九〇八年には1622 Sutter St., Tel. West 7948にあった(前掲「在米日本人住所姓名録」一頁)。

(5) 野田弥助とは、牛鳥家の下男で牛鳥謹彌の渡米に際して同行した(山田義雄『花は一色にあらざ―アメリカで「トテトキング」と呼ばれ日本人の心を伝えた牛鳥謹彌―』

西日本新聞社、九一頁)。

(6) 沼野安太郎は明治三六年東京高商(現・一橋大学)を卒業後、三七年九月に外交科試験に合格し、最終官歴は天津総領事である(戦前期官僚制研究会編・泰郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、一九八一、四二九頁)。一九一九年没。洪沢栄一の渡米実業団(明治四二年)に関わる(『洪沢栄一伝記資料』第三三二巻一一九―二〇頁)。

(7) 「兄上」とは、長男「徹介」であろう。「十才の頃備前で母と死別。まもなく二才年上の兄を誘って状況すべく家を出をした。岡山駅で家の者に発見され連れ戻された。将来を案じられた父陣三(「正しくは、陳三」)の熟慮の末、牧師の紹介で関西学院の吉岡院長の御指導を受けること)となったが、ともに家を出したのが徹介である(神崎澄江「夫驥一のこと」「恒平クラブ通信」「恒平」三六、三七合併号、一九七三年一月、一六頁。なお、澄江は、みち枝死後、再々婚した夫人である)。また「久」は、次女で養女にいった「ひさ」で驥一の妹である。妹で長女は「ます」である(戸籍により確認)。

(8) 吉岡美津(一八九〇―一九二九)は、関西学院第二代院長吉岡<sup>キトウ</sup>美国の長女で兵庫県立第一高女より、奈良女高師(現・奈良女子大学)で物理・数学を専攻した。後年、佐保会(奈良女子大の同窓会)の神戸支部長を務めた。神崎驥一と



結婚するために渡米した。結婚式は、おそらくサンフランシスコの美以教会 (2012 Pine Str.「在米日本人住所姓名録」一頁、日米社『在米日本人年鑑』一九〇八〔日系移民資料集第三期、『日米年鑑』第四集、日本図書センター、二〇〇一〕) で、その昇天は一九二九年九月二〇日である(井上琢智「吉岡美国と敬神愛人(四)」『関西学院史紀要』第九号、二〇〇三、一四頁)。吉岡の長男は美清で、神崎が再婚した次女みち枝も一九四一年昇天した(井上同論文、三五頁注二一)。

(9) 天洋丸は、一九〇八年、長崎三菱造船所で建造された純国産大型貨客船で、東洋汽船、のちに日本郵船が所有していた貨客船で、当初サンフランシスコ航路に就航。日本における貨客船で初めて二万トンを超え(二三、四五四トンの、タービン機関を使用した最初の船で、日本船舶史上の一大マイルストーンとなっている。なお、一九一八年パリ講和会議へ特使として派遣された牧野伸顕全権委員および随員約二〇名が乗船し、一九一八年一月一日に横浜を出航したのが本船である(チャオ埴原三鈴、中馬清福『排日移民法』と戦った外交官―一九二〇年代日本外交と駐米全権大使・埴原正直』(二〇一一、二二頁)。東洋汽船の経営難から日本郵船に移籍の上、後継の浅間丸級貨客船と入れ替わるようにリタイアし、解体された(松井邦夫『日本商船・船名考』海文堂出版。一三一頁に筆

者による天洋丸の画が収録されている)。

(10) 畑敏三(一八八〇―一九五七) 関西学院高等学部教授、旧制中学部長。丸亀生まれ。本名は敏三。出生届に観三と誤記され、以後、観・観・敏・敏の字を随時使った。一八九七年九月、松山中学校から関西学院普通学部普通科第三学年に転入。自助会とグリーククラブ、野球部に参加。神戸では初めての曲球(カーブ)を投げた。早稲田大学文学専門部を第一回生として卒業。麻布中学校教師を経て、一二年一二月に渡米。パークレー市山手のスブルース街に、普通科の二年後輩での中に第五代院長となる神崎驥一同に住み四年二ヶ月滞在。カリフォルニア大学大学院で美学、ギリシャ哲学を専攻(『増補改訂版 関西学院事典』二〇一四、デジタル版で公開)。

(11) 仏教会は、1617 Gough St. Tel. West 6401 にあった(『前掲「在米日本人住所姓名録」』『在米日本人年鑑』一頁)。

(12) この日記は、市販の NOTEBOOK (発売元のトレード・マークは「馬上の兜をかぶった武士」に「一九一九日記」と書き、K. Kanazaki / Tokyo) とサインを入れている。なお、本文は横書きである。

(13) 渡邊金三は、「新潟出身で、親は小さな呉服商で……中学を出るとすぐに上京……英語学校でいつも近くにいた」。渡米し、サクラメントやストレスノで働き、……今はサンフランシスコで、会計学という『大福帳』を西洋風に数字

でつける(複式簿記)勉強」(山田義雄前掲書、一一五—一六頁)していた人物で、牛島謹彌は見込んで雇用し、「右腕」となった。後に牛島が経営するデルタ「シマ農場(農園)」の総括を福島信太郎(静岡県出身で、三重県の何代も続いた医者の家系で、勉学のために上京し、陸軍に入り予備役になるのをまっけて渡米、牛島とともにサンノースの農園で働いた「気心の知れた仲間」八五頁)とともに行った(二七九頁)。また、「渡邊金藏君—牛島農園支配人—」(金井重雄・伊藤晚松編『北米之日本人』(一九一〇、一四九頁以下を参照のこと)。牛島謹彌については注43を参照のこと)。

(14) 川崎巳之太郎(一八七三—一九五二)は、一八九三年、明治学院卒業後、『世界之日本』の編集長、月刊雑誌『天地人』を発行した。九八年、渡米し、カリフォルニア大学の聴講生となり、『日米新聞』を刊行した。彼はカリフォルニアに送られたスパイであった(『特高警察関係資料集成』第六巻解題、不二出版、七四頁)。一九〇一年に帰国し、翌年に日本植民会社(後述の大隈が会頭となった日本移民協会とは別組織)を設立した。〇三年、日本植民会社事業開始のためペルーに渡るが、日露戦争勃発により中止。日露戦争中は、アメリカ合衆国で『大阪毎日新聞』、『報知新聞』、『時事新報』の特派員。〇九年帰国し内務省警保局・社会局嘱託。一九年第一回国際労働会議に政府

随員として派遣された。二七年、衆議院補欠選挙で当選。

(15) 米国日本人学童問題とは、サンフランシスコ市の日本学童隔離命令(一九〇六年一月一日)に端を発する問題である。この問題に関して、一九〇六年一月一日、上野季三郎領事、アメリカ商務長官とが会談し、その結果、〇七年三月一三日同市学務局隔離命令を取り消し、日本学童の復学を許可した(『近代日本総合年表』第三版、岩波書店、一八八頁)。なお、この問題から新移民法までの過程については、井上琢智「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について—神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練—」(中)『関西学院史紀要』二五号、二〇一九年三月五六頁、および注八一)を参照のこと。

(16) 一九一九年七月十一日の神崎の洪澤事務所訪問洪沢との対談については、『洪沢栄一伝記資料』(デジタル版)では記録されていないようであるが、他日以下のように二人は会談している。同年、(一)五月十七日曇 軽寒 〇上略十一時、桑港アレキサンダー、リンチ二氏及町田豊千代・神崎驥一氏等来訪、日米関係ノ事ヲ談話ス、米人帰後神崎氏等ト午喰ヲ共ニシ〇下略(『洪沢栄一日記』第三三巻、四九二頁)。(二)五月三二日 是日、当委員会、東京銀行倶楽部ニ開カレ、栄一出席、在米日本人会ヨリ派遣セラレタル神崎驥一ヲ招ジ、アメリカ合衆国カリフォルニ

ア州在留日本人ノ状況ニ関スル報告ヲ聴取ス。此会合ニ於テ当委員会規約第五項ヲ修正ス(第三三卷、四九二—九三頁)。

(17) 埴原正直(一八七六一—一九三四)は、東京専門学校(現・早稲田大学)英語政治科卒業後、東洋経済新報社に勤務し、日本最初の外交専門誌『外交時報』を刊行した。九八年、外務省に入省し、一九一六年総領事としてサンフランシスコ在勤、一八年六月外務省通商局長、同年一〇月外務省政務局長、一九年外務次官。二一年のワシントン會議に海軍大臣・加藤友三郎・駐アメリカ大使幣原全權卷委員に随行し、二二年、幣原の後任として特命全權大使・アメリカ駐劄(泰邦彦前掲書、一八五頁)。

アメリカ大使館一等書記官時代の一九〇九年、コロラド州などアメリカ八州に拡散する日本人移民の居住地の実態調査を行ない、その報告書を外務大臣の小村寿太郎に提出したが、不衛生で猥雑極まる日本人町のあまりの酷さに外務省は機密文書として封印した。

一九二四年の排日移民法案阻止のために国務長官C・E・ヒューズにあてた書簡中に書かれた「深刻な結果」の一句が対米威嚇であるとアメリカ国内で問題化し、法案に賛成しないとみられていた上院が一斉に賛成に動いた。その結果、埴原書簡が同法成立の一因とみなされ責任をとって帰国することとなった。(簗原俊洋『アメリカの排日運

動と日米関係―『排日移民法』はなぜ成立したか―朝日新聞出版、二〇一六、二六四頁)。外交界では小柄な体軀から「リトル・ハニー」とあだ名された。なお、チャオ埴原三鈴、中馬清福前掲書も参照のこと。

(18) 田中都吉(一八七七—一九六一)は、東京高商(現・一橋大学)を卒業(一八九七)し、一九一六年、アメリカ在勤の大使館参事官、一九年、外務省通商局長となり、二二年外務省次官となり、翌年依願免本官。『ジャパントイムズ』社長を経て、ソヴィエト連邦駐劄特命全權大使(泰邦彦前掲書、一四〇頁)。

(19) 浅田江村(彦一・空花)は、一八九二年関西学院基督教青年会(YMCA)に入会し、一八九五年頃に普通学部を中途退学し、一九〇六年に博文館に入館、一九一七年『太陽』主筆となった(井上琢智「浅田彦一(空花・江村)」『関西学院史紀要』第八号、一七七—一八九頁、二〇〇二)。この結果、一九一九年九月の『太陽』(第二五卷一—号)に神崎は「日米関係ノ新現象《加州に於ける排日運動再燃の意義》」を掲載した(この論文については、井上掲掲論文「浅田彦一(空花・江村)」の「付録二」は漏れている。また、その内容については、井上琢智前掲論文「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」(中)五八—一六〇頁)を参照のこと。なお、一九二六年にも神崎は「太平洋関係調査會議に於ける移民問題の考察」(『太陽』第

三二卷（主筆は長谷川誠也）第四号）に掲載した。

(20) 一八九七年二月二十七日、ハワイ到着の日本移民六六五人中四六三人が、手続き不備などの理由で上陸を拒否され、三月二〇日に、また、三月一九日には一六三人が、四月九日には五四九人が送還されるなどの事件が生じ、五月一日には駐ハワイ公使がハワイ外相に抗議した（九八年七月賠償金支払いで決着した）。しかし、駐米公使星亨はアメリカのハワイ合併阻止のためにハワイ占領を具申、六月には大隈外相がハワイ合併は日本に利益を損ねるとアメリカ国務長官に抗議したが、星公使に損ねないと回答した（前掲『近代日本総合年表』一五〇頁）。その後、カリフォルニアを中心にアメリカ西海岸で日本人排斥運動が起こり、林董外務大臣とオプライエン駐日大使との間で一連の日米紳士協定が締結され（一九〇七—〇八年）、日本側もいわゆる写真結婚花嫁渡航禁止措置（一九二〇年三月）など努力を重ねたが、一九二四年五月一日に人種差別条項を含むいわゆる排日移民法がアメリカ議会会で可決された（ただし、この法案による規制の対象は、南欧、東欧、ロシアからの移民でもあったことは重要である（五味俊樹「アングロ・サクソニズムと一九二四年移民法」三輪公忠編著『日米危機の起源と排日移民法』論創社、一九九七、一八四頁）。これは、渋沢を中心とする日米関係委員会の設置（一九一六年一月）と日米関係改善の民

間レベルでの努力を無に帰するものであった（片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究—戦間期日本の「ワロ」の活動を中心として—』慶応義塾大学出版会、二〇〇三、四三—四四頁）。このような状況下にあつて、神崎驥一は渋沢の要請に応じて、日米を往復した。

(21) 人種問題については、一九一九年二月七日、国際連盟規約委員会で、日本代表は人種的差別待遇撤廃の提案をした（『近代日本総合年表』第三版、岩波書店、二三八頁）。この詳細については、チャオ埴原三鈴、中馬清福前掲書（第一章「世界の檜舞台へ—新しい秩序形成への参加—」を参照のこと。

(22) 一八九八年、ドイツが膠州湾を租借し、山東省に権益を獲得したが、第一次世界大戦中の一九一四年八月時に、日本はドイツに宣戦布告、青島に出兵し、一五年一月に日本は二十一カ条を要求し、山東省におけるドイツ権益の継承その他の権益拡大を突きつけた。その要求が通ると国民的な反対運動起きた。一七年一月には、石井・ラッシング協定が結ばれ、門戸開放を主張するアメリカは日本の山東省権益を認め、逆に日本はアメリカの門戸開放などの要求を認めた。一九年のパリ講和会議で中国は、二十一カ条要求の無効を訴えたものの、英・仏は日本の大戦参戦の条件で中国大陸での利権拡大に反対しないという密約があつたため、中国の要求は取り上げられず、同

年一〇月締結のベルサイユ条約でも日本の山東省權益繼承が認められた。中国民衆が強く反発し、五・四運動が起こり、中国政府もそれにおされベルサイユ条約の調印を拒否した。一九二一―二二年のワシントン会議では、国際協調の高まりから、アメリカ大統領ハーディングの提唱で海軍軍縮と中国・太平洋での利害対立の調停がはかられたものの、二二年二月には、九カ国条約が調印され、中国の主権尊重・機会均等が認められ、それに伴い、石井・ランシング協定は破棄され、日本と中国間では「山東懸案に関する条約」が締結され、山東省權益の中国返還が決まった。中国は参加していないが、太平洋に関する四カ国条約の成立に伴い日英同盟は破棄された（ワシントン会議での軍縮運動に対する関西学院での軍縮運動の賛成の決議などの対応については井上琢智「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」（中）、四五頁）。

(23) 日本統計協会の前身は、一八七六年に設立された表記学社と一八七八年に設立された製表社である。これらの創設にあたっては、杉亨二（一八二八―一九一七）を中心とする我が国統計の先駆者が数多く関わっている。後者はその後、東京統計協会と改称し、『統計集誌』を編集・刊行するほか、統計懇話会、統計講話会の開催、統計書の刊行など統計情報の提供に重点を置いて活動し、一九〇二年に社団法人となった。両団体は、一九四四年

に合併して財団法人大日本統計協会となった（日本統計協会の Web より）。

(24) 日米関係委員会は、洪沢栄一が一九一六年、実業界から退いたが、前年の一五年にサンフランシスコ商業会議所内に「日米関係委員会」が創設されたのに呼応して、その年に日米親善を目的として組織した委員会が、約三〇名からなり、井上準之助、新渡戸稲造らが参加したが、三九年解散した（中嶋啓雄「洪沢栄一と米国のフイランソロビー」、飯森朋子編著前掲書、六三頁）。

(25) 日本移民協会は、カリフォルニアで外国人土地法案が成立した翌年の一九一四年に大隈重信を会頭、添田寿一を副会頭として設立された。洪沢栄一は設立総会で演説し日本人移民の行状がアメリカでの排斥運動を招いた一因であると指摘し、北米での経験を踏まえ、渡航前教育による移民の資質向上が重要であり、また新たな移民先を模索する必要を説いた（名村優子「洪沢栄一のブラジル植民事業支援」飯森朋子編著『国際交流に託した洪沢栄一の望み―「民」による平和と共存の模索』ミネルヴァ書房、二〇一九、二一〇―一四頁。なお、このコラムには、川崎巳之太郎の日本植民会社には言及されていない）。

(26) この高橋徹夫は、以下の高橋であろうか。  
シアトルを中心とするアメリカ西北部における日本人移民労働運動のバイオニアであった佐々木勝成は、

一九〇六年頃に阿部豊治などとともにシアトルにおいて「日本人労働組合」を設立し、機関誌「同胞」を発行した。〇七年にワシントン州・ペーリンガムにおいて排日の機運が高まった時、佐々木は同地に赴いて当時排日運動の中心勢力であった労働組合の集会で講演し、シアトルにおける日本人労働者、労働組合の状況を説明して理解を求めるとともに、日本人労働者、アメリカ人労働者間の連帯を力説したが、途絶した。しかし一九一五年に再度、佐々木は「日本人労働組合」を結成するに際して、かつて対立していた東洋貿易会社社長高橋徹夫を会長に迎え自らは常任幹事に就任した（黒川勝利「資料」アメリカ西北部日本人移民労働運動の先駆者―佐々木勝成に関する新資料―）『岡山大学経済学会雑誌』第四八巻第三号、二〇一七、一三三頁。

(27) 植原悦二郎（一八七七一―一九六二）は、豊科高等小学校卒業後、製糸工場での女工の検査、横浜税関勤務を経て、一八九九年、渡米し、スクール・ボーイとしてハイスクールを出て、週刊紙『日米商報』を発行しながら、一九〇七年、ワシントン州立大学を卒業し、同年ロンドン大学大学院に進み、一九一〇年に経済科学（economic science）の博士号を取得した。翌年に帰国し、明治大学教授、立教大学教授、東京高等工業学校講師を歴任し、政治学や比較憲法論等を講じていた。吉野作造の民本主義に対し、天

皇には統治権はあるが、主権は国民に存するとする国民主権論を大胆に主張、急進的な大正デモクラットとして言論活動を展開した。ただし、「支部設置」の「支部」は不明である。

(28) 長藤太は、石崎常藏「栃木人―明治・大正・昭和に活躍した人びとたち―とちぎ市制施行八〇周年を記して―」（二〇一七、三三三頁）に登場する人物であろうか。

(29) Woods, E. (1861-1938) は弁護士、外交官、政治家であった。駐日大使として、一九二三年七月二一日に就任し、二四年六月五日辞任。したがって、この記述から言えるのは、大使就任前から神崎と交流があったことになる。シドニー・エル・ギューリック（一八六〇―一九四五）は、一八八八年に来日し、熊本、大阪、松山、さらに同志社で科学概論・進化論を論じ、京都帝国大学では宗教学を講義した。一九一三年帰国後、日本の平和と日米の相互理解のために尽力し、排日法案に反対。「青い眼の人形」を送る運動をした（『日本キリスト教歴史大事典』教文館、三七六頁）。彼の洪沢栄一宛書簡（一九二四年五月二六日）によれば、"Your welcome to our air filters, being fully reported, is having a good influence over here, as is also your farewell meeting for Ambassador Woods."（前掲『洪沢栄一伝記資料』デジタル版、第三四巻、二五七頁）とあるようにしばしば登場する。

(30) 報知社は、一八七二年に前島密、小西義敬らが『郵便報知新聞』を創刊し、七三年には発行会社「報知社」として設立し、九四年に新聞紙名を『報知新聞』に改称した。一九三〇年には当時の大日本雄弁会講談社に買収され、三三年には社名が「報知新聞社」に変更された。

(31) この堀越は、堀越善重郎（一八六三—一九三六）であろうか。彼は現・足利市に生まれ、東京商法講習所（現・一橋大学）を一八八三年に卒業し、翌年渡米し、ニューヨークのメーソン商会に入社し、足利の羽二重絹織物を輸入する。翌年八五年、日本支店支配人となり、日米貿易の拡大に貢献。九三年、渋沢栄一、中上川彦次郎、益田孝らの後援を得て堀越商会を創立し、ロンドン、パリ、ニューヨークなどに支店を設け大貿易商となった（日外アソシエーツ『二〇世紀日本人名事典』、二〇〇四）。

なお、牛島は慶應義塾を出て実業界を目指していた同郷先輩の日比翁助（一八六〇—一九三三）の紹介状（その裏に堀越の名前が書かれていた）をもつて渡米したが、その「東京モスリン商会社長」（堀越商会はこの社名の後継名か）堀越からの連絡を受けてサンフランシスコに向ってきたのが和田豊治であった（山田義雄前掲書、二〇頁、六五—六六頁）。和田は、一八八二年慶應義塾に入学し、八四年卒業している（『慶應義塾一五〇年史資料集Ⅰ』慶應義塾大学出版会、二〇一二、七一—九頁。『慶應義塾史事

典』慶應義塾大学出版、二〇〇八、七八—八四頁）。なお、[Neur [-o-] Supply Bureau ニ関スル実験] が何を指すか不明である。

(32) 築地精養軒は、新橋—横浜間の鉄道開通（一八七二）の年に日本におけるフランス料理店の草分けとして、東京・築地に創業された、七六年の上野公園開設に伴い、不忍池畔の現在の地に「上野精養軒」が誕生した。

(33) 坂本芳治とは、信託会社の組織と経営』第三版（一九二七、巖松堂）の著者であろうか。 <https://dlndi.go.jp/infoandip/pid/1072936>（国立国会図書館蔵）。

(34) 一九一九年七月三〇日の神崎の日米関係委員会への出席について、『渋沢栄一伝記資料』デジタル版に「是日、東京銀行倶楽部ニ於テ日米関係委員会開カル。栄一出席シテ当会代表神崎驥一ヲ招ジ、当会ヨリ提案セルアメリカ合衆国排日問題対策ヲ議ス。爾後数回神崎来訪ス（第三三巻、四〇四—〇五頁）。なお、当日、神崎は最近ノ日米関係ト将来ノ運動方針」を提案している。その内容の概略は、井上琢智前掲論文「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」（下）一一二—一三頁）を参照のこと。

(35) 内田嘉吉（一八六六—一九三三）は、一八八四年、東京外国語学校を卒業し、九一年七月、帝国大学法科大学法律学科（英法）を卒業。同年七月、通信省に入り、

一九〇一年七月、管船局長に就任。一九一〇年八月、台湾総督府民政長官となり台湾に赴任し、一二年より一三年まで台湾総督を務めた。一九一七年三月、通信次官に就任し、一九一八年九月に辞任。その年に貴族院議員。南洋協会・ラテンアメリカ協会の設立に尽力し、二二年、日本産業協会設立にあたり、会長就任（臼井勝美、高村直助、島海靖、由井正臣編『日本近現代人名辞典』吉川弘文堂、二〇〇一、一四六頁）。

(36) 「日本」移民協会より五日午前八時同会ニテ講演依頼アリ」の講演の記録は「洪沢栄一伝記資料」デジタル版では見当たらない。

(37) 藤瀬政次郎（二八六七―一九二七）は、長崎県出身で、東京商法講習所（現・一橋大学）を卒業し、三井物産株式会社に入社し、香港支店を経て、上海支店長、綿花部長を歴任し、取締役に就任。東洋綿花株式会社（同社は、三井物産綿花部が分離独立したものに）に関与し、代表取締役社長に就任。政財界に幅広い人脈を持ち、東亜同文書院教授で、南満州鉄道社員山田純三郎を通じて、孫文の辛亥革命を支援し、犬養毅、新渡戸稲造らとともに南洋協会の設立発起人、洪沢栄一、中島久万吉らとともに日米電信株式会社創立委員なども務めた。

(38) 東京銀行集会所は、「東京市所在の銀行業者相会して其交誼を厚ふし経済上の利害を講究するを目的」として、

一八八〇年九月一日に創立された。当時、摂善会とは別に懇親会があった。八月三日の摂善会臨時総会で、摂善会と懇親会とを合同し、新たに「銀行集会所」を設立することが決められた。同集会所では、摂善会で研究してきた手形交換（W・S・ジェヴォンズの「手形小切手制度」が第三回摂善会で議論された（井上琢智「黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化―」日本評論社、二〇〇六、一九七―九八頁）、為替取組の事務を引き続き検討することとなった。摂善会（田村俊夫『洪沢栄一と摂善会』近代セールズ社、一九六三）とは、国立銀行条例の改正後、銀行の設立漸く増加し、翌一〇年になって全国で二十にもなり、東京での国立・私立銀行の本店・支店もおよそ一にもなったために、洪沢栄一は銀行業者会合の必要を主唱し、「東京府下同業者多数の同意を得て、同年七月二日始めて同業者の会合を第一国立銀行に開き、一会を組織して摂善会と称す、之れ実に現今東京銀行集会所の濫觴にして、又我国銀行家会合の嚆矢なり」（『洪沢栄一 ゆかりの地―東京銀行集会所及銀行倶楽部―』洪沢栄一記念財団Web）。なお、この日の集会について、『洪沢栄一伝記資料』デジタル版（第三三巻、四九三―九六および四〇四―〇五頁）では、以下のように記述している。

「是日、当委員会小集會、東京銀行倶楽部二開カレ、栄



一出席、在米日本人会代表神崎驥一ヲ招ジ、同会ヨリ提案セルアメリカ合衆国排日問題対策ヲ議ス。九月二十五日神崎飛鳥山〔洪沢〕邸ニ来訪ス。十月四日神崎兜町事務所ニ来訪ス。同十一日再ビ同所ニ来訪ス。

〔是日、東京銀行倶楽部ニ於テ日米関係委員会開カル。栄一出席シテ当会代表神崎驥一ヲ招ジ、当会ヨリ提案セルアメリカ合衆国排日問題対策ヲ議ス。爾後数回神崎来訪ス〕〔集会日時通知表〕〔洪沢子爵家所蔵〕。

(39) 阪谷芳郎（一八六三—一九四一）は、現在の井原市出身で、幕末に開国派として活躍した漢学者、阪谷朗廬（朗廬）の四男として生まれる。一八八四年、東京大学文学部政治学理財科を卒業後、大蔵省に入省する。一九〇三年には大蔵次官〇六年、大蔵大臣を務めた。一九〇七年九月、日露戦争の戦費調達などの功績により男爵が授けられる。一二年七月から一五年まで東京市長を務めた。市長在任中に、明治神宮、明治神宮野球場の造営や乃木神社の建立に尽力した。専修大学にも教員として出講し、のち学長を務め、創設者の一人で初代学長だった相馬永胤死後の大学運営を取り仕切った。妻琴子は洪沢栄一の次女である。

(40) 増田明六（一八七三—一九二九）は「龍門社を守る忠実剛誠の人」とされる洪沢栄一の側近であり、渡米実業団など洪沢の外遊につねに同行した（『龍門社の歩み…青淵先生を思い続けて一二〇年』（企画展図録、洪沢栄一記念

財団付属洪沢史料館編、二〇〇六、一〇頁）。なお、井上琢智前掲論文「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」（下）、一一五、一三五頁を参照のこと。

(41) この七月三〇日の集会については、『洪沢栄一伝記資料』デジタル版、第三三巻、四〇四頁に以下のように記録されている。

〔是日、東京銀行倶楽部ニ於テ日米関係委員会開カル。栄一出席シテ当会代表神崎驥一ヲ招ジ、当会ヨリ提案セルアメリカ合衆国排日問題対策ヲ議ス〕。

(42) 内田康哉（一八六五—一九三三）は、肥後国八代郡竜北（現、熊本県八代郡氷川町）に生まれ、新川義塾などで学んだ後、同志社英学校に入学したが、二年後に退学し、東京帝国大学法科卒業後、外務省に入省し、ロンドン公使館勤務、清国北京公使館勤務中に一時、臨時代理公使・オーストリア公使兼スイス公使・アメリカ大使（内田は一九〇九年二月、特命全権大使となり、その後、一九一一年八月、埴原正直が臨時代理大使となり、翌年二月、珍田捨巳が特命全権大使となった）・ロシア大使などを歴任し、第四次伊藤内閣の外務次官を務め、第二次西園寺内閣（一九一一—一二）、原内閣（一九一八—）、高橋内閣、加藤友三郎内閣（一九二三）に於いて外務大臣を務める。特に原内閣以降、パリ講和会議やワシントン会議の時期の外相として、ベルサイユ体制、ワシントン体制の構築

に関与し、後述のように一九二八年の不戦条約成立にも関係するなど、第一次世界大戦後の国際協調体制を創設した一人であった。

(43) 牛島謹彌(一八六四—一九二六)は、現久留米市に生まれ、一八八五年上京し、二松学舎に入学、八八年渡米し、農業労働を経験(この頃から「ジョージ・シマ」(山田義雄前掲書、七九頁)と呼ばれようになった)し、九一年にはニューホープ村で自営耕作デルタ開拓に従事、九年には「シマ農園」(品種改良された高品質のポテト生産)を拡大した。一九〇六年のサンフランシスコ地震に際して、日本政府も巨額の救援拠金を送り、牛島も被災者支援に尽力し、「ポテト王」と呼ばれるようになった。その前の一九〇四年にスタンクトンに「須市日本人会」が創立され(一六一頁)、その活動が評判になると、翌年、サンフランシスコにも「在米日本人協議会」が創立され、「日本人学童隔離教育」を重視し、各地の日本人によびかけると、「スタンクトン日本人会」は牛島を会長にすえ、その後、「在米日本人連合協議会」第一回会議が、三三地方団体から代表が参加し、理事長に我孫子久太郎が就任、牛島は理事となった。一九〇八年「在米日本人会」が設立されると、初代会長(一二六年)に選出された(二二三—二五頁)。翌年〇九年になると渋沢栄一の日本実業団が訪米し、二人の初会見はこのときであった(山田義雄前

掲書、「年表」も参照のこと)。また、「牛島謹彌君—在米日本人会々々長—」(前掲書金井重雄・伊藤晚松編、一四六—一四九頁)参照のこと。また、前掲「在米日本人住所姓名録」(二頁)によれば、在米日本人総合協議会、桑港日本人協議会、桑港日本人会の住所が明記されている。なお、久留米の江碕(わだ)塾の門下生であった牛島の先輩(山田義雄前掲書、三六一—三八頁)日比翁助は一八八〇年、慶應義塾に入学、八四年に卒業し、三越百貨店の創業を主導した(前掲『慶應義塾一五〇年史資料集I』五三二頁。前掲書『慶應義塾史事典』、七二七—二八頁)。

(44) この太田は、アメリカに留学し、一九一六年開催された「第一次在米同窓会」に参加していた太田義三郎であろうか。これは神崎驥一の一時帰国送別会、畑歎三及び在米日本人会書記長に就任した乾精末のために開催されたものである(井上琢智・高橋正・比留井弘司「乾精末」『関西学院史紀要』第一号、二〇〇五、二九六頁)。

(45) 滝本為三は、一九二三年一〇月一三日時点の身分は、「桑港在米日本人会書記長」である。神崎驥一は、一九二一年三月二八日に関西学院高等学部商科部長就任している。滝本は神崎の後任者であろう。当時の二人の関係については、井上琢智前掲論文「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」(下)、一一四—一五頁を参照のこと。

(46) 安孫子久太郎（一八六五—一九三六）は、新潟県妙高市に生まれたが、母の死亡したため、祖父母のもとで育ったものの、家出して上京し、キリスト教に改宗。八五年、サンフランシスコ福音会の援助で渡米した。現地のリンカーン・グラマースクールを卒業後、浜田房次郎、玉井重次郎らとともにカリフォルニア大学バークレー校に入學し、社会学を学ぶ一方、サンフランシスコ福音会（住所は1837 Bush St. Tel. West 3729）の中心メンバーとして同会の発展に尽力した。卒業後、ランドリー業やレストランなどを経営していたが、一八九七年、『桑港日本新聞』を、翌年には『北米日報』をも買収し、二社を合併して『日米』を創刊。一九〇三年に、日米勸業社を設立、各地の鉄道、鉱山、農園に日本人を送り込むなど渡米した青年たちへの援助に尽力するとともに、排日派との折衝において日本人社会の中心的な発言者として活躍。一九〇七年にハワイからの転航が禁止になると人材供給を絶たれ、請負業は下火となる。一九〇七年、リビングストンに二千エーカーの土地を購入。大和コロニーを建設し、白人と日本人との理想的な協調関係を実現しようとしたが、日米新聞の収益をヤマトコロニーに大量につき込んだため、日米新聞の経営は不調となった。〇九年、帰国した後に津田梅子の妹、余奈子と結婚した。

(47) Elliot (Charles William Elliot, 1834-1926) は、アメリカ合

衆国ハーバード大学の一九世紀から二〇世紀にかけての学長であり、ニューヨークの日米関係委員会往復書簡を交換している。渋沢を介して書簡を交換している。例えば、エリオットから埴原大使への書簡（一九二四年四月二三日）では、「排日運動は日米両国間の歴史的友情、並に米国人が他国民に対して表示し来れる好意に関する凡る伝統に背反す／同運動は我慾と恐怖とに基ける政策に過ぎず、本電報の公表如何は閣下の裁量に一任す／委員長渋沢子爵に対して、予の謝意を伝達せられんことを希ふ／チャールス・ダブルユー・エリオット／埴原大使閣下」（邦訳のみ掲載、『渋沢栄一伝記資料』デジタル版、第三四巻、一九四頁、スラッシュは改行を示す）。

(48) 「高等商業学校」は、関西学院の場合、一九二二年に高等学部商科が、一九二二年には「高等商業学部」、一九三五年には、「高等商業学校」となった。また、当時、高商と呼ばれた学校には、東京高等商業学校（一八八七、一九二〇年には東京商科大学として大学に昇格）、神戸高等商業学校（一九〇二）、山口高等商業学校（一九〇五）、長崎高等商業学校（一九〇五）、小樽高等商業学校（一九一〇）があった。この東京高商は渋沢栄一と東京高商との関係を考慮すると、この「高等商業学校」とは東京高商の可能性が高い。ただし、この「移民協会講習会の為め八時より十時迄講演」については調査を一橋大学学国史資料

室に依頼したが、現時点では未確認である。

- (49) この八月五日の渋沢訪問については、『渋沢栄一伝記資料』デジタル版では記録されていない。

- (50) 梶原仲治（一八七一一一九三九）は、一八九七年、東京帝国大学法科大学卒業後、日本銀行へ入行し、一九一八年に同行を辞職し、同年、横浜正金銀行取締役就任、副頭取就任、翌年三月横浜正金銀行第一頭取（一二二）、同年、一〇月、日本勧業銀行総裁就任した。

- (51) 「一九一九年八月」八日会ニ於テ日米新關係ニ付キ講演」については、「八日会」が特定化できず、確認できていない。

- (52) 山本熊太郎は、『日仏協約祝賀会報告書』（同会編、明治四〇年刊）に拾円を寄付した人物であろうか（『渋沢栄一伝記資料』デジタル版、第二八巻、七五九頁）。彼はまた『伊藤統監歓迎会報告書』（同会事務所編、第一一六四頁、明治四〇年一二月刊）でも、同歓迎会へ拾円を寄付している（同デジタル版、二八巻、七七九頁）。

- (53) 時枝誠之（一八七〇—一九三四）は、福岡県土族時枝誠道の二男として福岡県に生まれ、福岡県立尋常中学修猷館を経て、一八九八年、東京帝国大学法科大学政治科を卒業。九九年、横浜正金銀行に入行し、サンフランシスコ支店支配人（支店長）を経て、本店人事課長兼庶務課長を務めた。サンフランシスコ支店時代には「ポテトキング」と呼ばれた農園経営者牛島謹爾に融資をしている。

日本語改良論者であり、日本語を総アルファベット表記にして名詞を英語に置き換えた「Neo-Japanism」を提唱した。

- (54) 井上準之助（一八六九—一九三三）は、大分県出身で、仙台第二高等学校を経て、一八九六年、帝国大学法科大学法律学科（英法）し、同年、山本達雄の勧めで日本銀行に入行し、一九〇六営業局長となり、ニューヨーク駐在を経験し、一九一一年横浜正金銀行取締役になったが、一九一九年、第九代日本銀行総裁に就任した（一二三三）。

さらに一九二七年第一代日本銀行総裁に就任した。彼は金輸出解禁と併せて財政緊縮を中心とするデフレーション政策を断行したため、三二三年、総選挙の応援演説に行く途中暗殺された（血盟団事件）。

- (55) 上野博覧会とは、不忍池畔で一九一八年八月から開催された電気博覧会のことであろう。一一四万六三六九人の入場者があったという（百崎誠「わが国博覧会の歴史と変遷」AD STUDIES, vol. 13, 2005公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団、七頁）。

- (56) 大倉喜八郎（一八三七—一九二八）は、現・新潟県新発田市に生まれ、一八五一年に江戸へ出て、鯉節商・乾物商時代・鉄砲商時代・御用達時代を経て、財界活動を開始した。その契機となったのは、一八七七年の東京商法会議所（現・東京商工会議所）、横浜洋銀取引所（横浜株

式取引所)での活躍であり、それを皮切りに、様々な方面で新規事業の設立に関与するなど、明治・大正期に貿易、建設、化学、製鉄、繊維、食品などの企業を数多く興した日本の実業家で中堅財閥である大倉財閥の設立者。渋沢栄一らと共に、鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立。東京経済大学の前身である大倉商業学校の創設者(一九〇〇)でもある。

(57) 一八一九年八月二五日の渋沢訪問については、『渋沢栄一伝記資料』デジタル版では記録されていない。

(58) ランバス (W. R. Lambuth, 1894—1921) は、父 J. W. ランバスの中国伝道開始の年、上海に生まれ、ヴァンダビルト大学で神学と医学を修める。八六年、MECS ジャパン・ミッションの総理として神戸へ着任し、八八年、関西学院創立に着手し、翌年八九年九月二八日、無一文のなか、神戸の地で関西学院創立した。九〇年一二月、妻の病のため離日し、本国伝道局において活躍し、一九一〇年、海外ミッション担当の監督に選任された。

『渋沢栄一伝記資料』デジタル版よれば(第三九卷、七五五頁)によれば、一九一九年「八月廿八日 木 午後四時 メソジスト教宣教師ランバス氏並ニ神崎驥一氏兜町ニ来約」とある。ランバスはこの年の「八月に、日本ミッション年会を主宰するために来日し……会議〔二十七〕の後、東京で渋沢栄一と会い、協力を要請した」

(石橋信義『ランバス物語』興正社、二〇〇四、一七八頁)との記述がそれにあたる。この点については、ランバス「日本雑記」(半田一吉訳『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八〇、五六頁)によれば、「サンフランシスコで同湾周辺での私達の仲間の指導的クリスチャン・ワーカールの一人神崎驥一氏が、ロウリングス (Dr. Rawlings) と私が渋沢男爵と会えるように約束をとりつけてくれた」と書いている。なお、井上琢智前掲論文「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について」(下)、一三三頁の(注九六)の記述は、この一九一九年の来日とシベリアから中国、朝鮮を回り、日本を再訪した「一九二一年の来日(横浜での昇天の年)とを混同して記述している。訂正します(なお、W. R. ランバスの年譜については、中西良夫訳「W. R. ランバス アフリカ伝統への祈りと足跡」、『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』(5))」関西学院キリスト教教育史資料Ⅹ、関西学院キリスト教主義教育研究室、一九九〇(二一六—一九頁)。

(59) Rawling, E. H. は、Walter Russell Lambuth, M.D., D.D., F.R.G.S. Nashville, TN: Board of Missions, Methodist Episcopal Church, South, 1921. [in memoriam] の著者である。ただし、神崎は誤って Rolling と書いている。

(60) 一九一九年九月九日の渋沢訪問については、『渋沢栄一

伝記資料』デジタル版では記録されていない。

(61) 鈴木文治（一八八五—一九四六）は、現在の栗原市出身で、在野のキリスト教伝道師本間俊平の影響により、社会問題に目覚めてた旧制山口高等学校を経て、同郷の先輩である吉野作造とともに、自由主義的な海老名弾正率いる組合派の本郷教会に所属、大学では社会政策学者桑田熊蔵の社会改良主義に共鳴し、社会運動家への志望を固めて、東京帝国大学法科大学政治学科を一九〇九年に卒業した。吉野作造の活動を陰で支え続けたのも鈴木である。卒業後、秀英舎（現・大日本印刷）を経て、一〇年、東京朝日新聞に入社。貧民問題の取材に取り組み、一一年ユニテリアン派の統一基督教弘道会（会長安部磯雄）に幹事として就職。一二年には、労働者の地位向上を目指して、友愛会を発足させた。一五、一六年に渡米してアメリカの労働組合事情を学び、また麻生久ら急進的な若手書記の影響もあり、次第に団結権、ストライキを主張するようになり、労働組合化を推し進めていった。一九年には「大日本労働総同盟友愛会」と改称。また同年、政府・財界主導型の労使協調団体「協調会」への参加を拒絶するなど、体制に対して対決的な姿勢を示した。

(62) 一九一九年九月十五日の渋沢事務所増田（明六）訪問については、『渋沢栄一伝記資料』デジタル版では記録されていない。

(63) 一九一九年九月十七日午後五時開催の日米関係委員会について『渋沢栄一伝記資料』デジタル版で以下のように記録している。

「是日、当委員会、東京銀行倶楽部二開カレ、栄一出席、協議ノ結果規約二一項ヲ追加シテ幹事ヲ置クコトニ決ス」（第三三卷、四九六—四九七頁）。

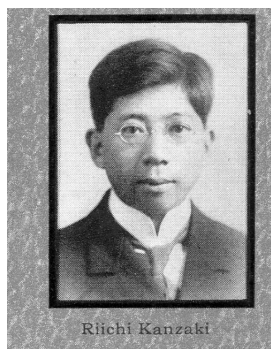
(64) 京橋采女とは、「采女町」のことであろうか。一八七二年、馬場先門に西洋料理店が開業した。しかし、その当日に「銀座大火」が発生し全焼。同年、木挽町に飯店舗を再建。翌年、采女町に移転し「築地精養軒」として本格開業した。一八七六年には「上野公園」の開設とともに支店「上野精養軒」も開業している。本稿、注三二を参照のこと。

(65) 飯田治彦とは、一九〇六年、東京銀座歌舞伎座横に弁理士事務所を創設し、初代所長となった飯田治彦（初代）のことであろうか。彼は弁理士会理事長・元特許局審査官を務めた。なお、現在も活動している飯田特許事務所はその後継である。彼は、豊田佐吉に同行し、「蓄電池発明のための奨励金を寄付した。その記事は以下のものである。

「私財百万円を投げ出して我発明界を刺戟す

理想的である蓄電装置の発明を奨励する為め万事を発明協会に託した協会では近く条件を決定

努力の人豊田翁の篤志産業發達の第一歩□□の発明の



カリフォルニア大学生時代の  
神崎驥<sup>(2)</sup>

## 【一】 史料解題

ために、一私人として日本發明界に尽そうと私財百万円を投げ出した―中略―翁は去る九月中旬上京して弁理士飯田治彦氏と共に丸ノ内發明協会を訪い、会長阪谷芳郎男専務理事宿利英治氏と会見―中略―調査委員会を設け、阪谷男を会長に理事宿利英治氏、工学博士高松豊吉氏、工学博士浅野応補氏外二十名

―中略―第一回調査委員会を九日丸の内日本倶楽部で開いて

一、發明の効用程度

二、發明の考案に対して發明補助費を出すや否や

三、できて来た發明品にのみ与えるか―中略―

第二回の委員会で決定の上近く社会に発表すると同時に、全国から世界的な發明品を募集する―後略―

〔神戸大学經濟経営研究所、新聞記事文庫、「救済および公益事業」、『中外商業新報』一九二四年一月七日。〕

神崎驥一（一八八四年八月一〇日―一九五九年四月一六日）は、東京府麹町区に生まれ、一九〇二年、関西学院普通学部（同級生には、後に関西学院を支えた中村賢二

郎、宮田守衛や本誌本号（第二七号）に登場する国際平和演説者乾精末がいる）を卒業後、英語専修科に在学した後、一九〇三年一月に渡米した。当初の住所は、「パークレー市山手スプリース街で先輩畑歆三〔注10〕<sup>(1)</sup>の同宿」であった（中坊馨談）。

その後、カリフォルニア大学で経済学、史学を学び卒業（一九〇九）、同大学院に進学し史学・政治学を研究しながら（一九一〇―一二）、カリフォルニアで一一年一月から、一九一三年末頃まで農業経営をした。友人中村によれば、[Sugar beet (テンサイ、サトウダイコンの) Plantation のコントラクター〔請負人として〕、神崎農園という名前の] (の) : : 4千エイカー : : 何百人の日本人、朝鮮人、ヒンズーを使っていた」という。

一九〇八年設立された「在米日本人会」（牛島謹彌会長〔注43〕）の書記長に、乾精末の後任として就任した。滞米中に第二代院長吉岡美国の長女美津（注8）と結婚した。

この書記長時代の一九〇六年一月一日に出されサンフランシスコ市の日本人学童隔離命令（注15）に端を発し、排日移民法制定の動きなどに代表される日米関係悪化を民間の立場から改善しようとしていた洪沢栄一の招聘をうけ、日米を往来し、アメリカとりわけカリフォルニアの状況を説明し、改善策についての諸会議に出席した。この神崎の往来を利用して関西学院は神崎の関西学院への帰任を打診したのは、一九二一年の関西学院高等学部二学部分離に際して高等商業学部長就任を望んだからである（文学部部长はH・F・ウッズウォースであった）。この神崎の関西学院への招聘開始は、一九一八年二月八日でアームストロング報告、サンフランシスコ在住の神崎氏と交渉中」と記録されている（『理事會会記録』）。

本「神崎驥一日記 一」は、現在関西学院大学学院史編纂室に所蔵されている以下の「日記」の最初の二冊の「日記」（一九一六年一月一日から一九一六年一月八日および一九一九年七月一日から一九一九年九月一七日）の翻刻であり、前者は在米時代にあたり、後者は在日時代である。

とりわけ、後者の記述から伺えるのは、洪沢栄一の日米関係委員会（注24）らでの活動の一環として、外務省の埴原正直（注17）、田中都吉（注18）、内田康哉（注42）、米駐日大使 Woods, E.（注29）、ハーバード大学名誉教授 Elliot, C. W.（注47）、さらに洪沢栄一の娘婿である阪谷芳郎（注39）、側近である増田明六（注40）、日本銀行井上準之助（注54）、横浜正金銀行の取締役梶原仲治（注50）、牛島に融資した時枝誠之（注53）、三井物産取締役の藤瀬政次郎（注37）と在米日本人会会長の牛島謹彌（注43）、神崎の後任書記長の滝本為三（注45）、さらには牛島と同様、カリフォルニアの日本人のリーダーの安孫子久太郎（注46）などと日米関係の改善策を議論・提案し、他方、カリフォルニア経済問題の解決のために、牛島に代わり交渉を継続した。このように日米関係の改善に努めて、日米を往復した神崎の活躍を見た「弊原（喜重郎）大使（一九一九年に駐米大使に就任し、二一年から二二年のワシントン会議に日本首席全権として参加）の時にも（神崎に）外交官に薦められていた」（天野利三郎談）とあるように、まさに神崎は日米関係史の中で「忘れさられた民間外交官」であった。

これら国際問題への取組に加えて、神崎は同窓の先輩畑敏三、同級で『太陽』主筆の浅田江村（注19）との交流を



続け、ランバス初代院長（注58）と洪沢栄一との会談の仲介を務めるなど、関西学院のために尽力した。

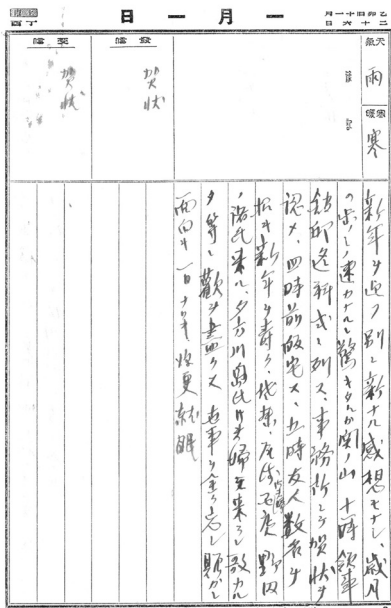
その後の神崎の活躍は、旧制大学開設に伴い、大学商経学部長を兼任、高等商業学部と大学商経学部教授でもあったが、主に学校行政に終始尽力した。さらに第四代院長ベーツの離日後、四〇年から五〇年の一〇年間に、第五代院長を務め、一時期、大学長、専門学校長をも兼ね、戦中、戦後の混乱期の関西学院の舵取りをした。

【二】「神崎驥一日記」について

現在、関西学院大学院史編纂室に所蔵されていていわゆる「神崎驥一日記」は以下の通りである。いずれも登録日は一九九〇年（A）と一九九六年（B）である。

- (1) 「日記」一九二六年一月一日～一月八日 (B)
- (2) 「日記」一九一九年七月一日～九月一七日 (B)
- (3) 「日記」一九二〇年一月一日～二月三十一日 (B)
- (4) 「日記」一九二一年一月三日～三月三日・九日 (B)
- (5) 「日記」一九二二年一月一日～二月一〇日 (B)  
九月九日～九月一五日 (B)
- (6) 「日記」一九二四年一月一日～四月一六日 (A)

- (7) 「日記」一九二七年九月一日～一〇月一七日 (A)
- (8) 「日記」一九二八年一月一日～二月四日 (A)
- (9) 「日記」一九三一年一月一日～一月一六日 (B)  
一九四六年一月一日～二月一六日 (B)
- (10) 「日記」一九三五年一月一日～二月四日 (B)  
一九四五年四月三～二月三十一日 (B)
- (11) 「日記」一九四〇年一月一日～三月二五日 (B)
- (12) 「日記」一九五二年一月四日～四月二一日 (B)
- (13) 「日記」一九五六年一月一日～二月三二日 (A)
- (14) 「日記」一九五八年一月一日～二月三二日 (B)



〔A三治明〕福岡版蔵 C〔元紀〕京都朝日-京都府立天満館

(15) 「日記」一九五九年一月七日～二月二一日 (B)

今後、この「日記」翻刻を継続する予定であるが、分量が多いこともあり、本誌による掲載は多年を要する可能性がある。

本翻刻については、倉橋桃代氏（同窓で三田市教育委員会で市史編纂事業に従事）に過大なるお世話になりました。ここに記してお礼を申し上げます。

### 【注】

(1) この注番号は、「日記」本文の注番号である。

(2) *The 1909 Blue and Gold of the University of California Berkeley, California*. Vol. 35, published by the Junior Class of University of California. Nineteen hundred and eight, p. 100.

### 【一九一九年七月一日への付記】

東ヶ崎<sup>あがき</sup>潔（一八九五—一九九二）は、サンフランシスコで、貿易に従事するかたわら生涯を自給伝道と明治初期の日本人渡米移民住民の苦難を献身的に助けた菊松の長男である。

カリフォルニア大学で学び、在学中に第一次大戦に従軍し、その後卒業して貿易会社に勤務し日米を往復した。金森通倫牧師の長女と結婚し、一九三三年に住居を日本に移した。

一九四六年以降、戦後米軍に接収されていた聖路加国際病院の返還に努力し、四九年からは国際基督教大学の設立に尽力し、初代理事長となった。他方、現在のジャパンタイムズの社長など企業経営者としても活躍し、戦後の日本のロータリークラブの復興、国際社会への復帰に努力、一九六八年には日本人として初めての国際ロータリーの会長を務めるなど、社会活動並びに社会奉仕に務めた。